Cappella Accademica49th Concert

カペラ・アカデミカ第 49 回定期演奏会

演奏曲目

S. ローザ：側にいることは　ソプラノ・林　百華
G. F. ヘンデル：私を泣かせてください　ソプラノ・林　百華
W.A.モーツァルト：魔笛より「愛の喜びは露と消え」ソプラノ・林　百華

A. ヴィヴァルディ：２つのフルートの為の協奏曲　ハ長調　RV533
フルート・石川　真理、続　真樹

A. ヴィヴァルディ：２つのトランペットの為の協奏曲　ハ長調　RV537
トランペット・福田 徳久、岡部 比呂男

D. チマローザ：歌劇「宮廷楽士長」　バリトン・河野 真剛

W. A. モーツァルト：ディヴェルティメント第２番　ニ長調　K.131

管弦楽：カペラ・アカデミカ
指　揮：吉川　紀彦

A.ヴィヴァルディ

D.チマローザ

W.A.モーツァルト

2018 年 10 月 20 日（土）

開場：午後１時 30 分　開演：午後２時
会場：浜松市勤労会館　U ホール
主催：カペラ・アカデミカ
助成：（公財）はましん地域振興財団
後援：（公財）浜松市文化振興財団、静岡新聞・静岡放送、中日新聞東海本社、K-mix

ホール内客席では携帯電話など全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いします。

ご　挨　拶

私共の演奏会にお越し頂き、誠にありがとうございます。
今夜はヘンデル作曲の、優雅な宮廷を想起させますフランス風序曲で始まる「水上の音楽」と、キリストの生涯と救済を喜びと誇りに満ちた音で綴った不朽の名作「メサイア」を取り上げました。来る年が皆様にとって幸せな 1 年となりますよう、ヘンデルの音楽に託して精いっぱい演奏致しますので最後までお楽しみいただけますようお願い申し上げます。

カペラ・アカデミカ団員一同

出　演　者

吉川 紀彦（ 指揮）

神奈川県横浜市出身。大阪労音管弦楽団でヴァイオリン奏者兼練習指揮者として活躍。1970 年に大阪市民管弦楽団の設立に参画。1972 年浜松に移り、1974 年にカペラ・アカデミカの設立に参画。ヴァイオリンを比企康蔵、藤田康夫、指揮法を濱田徳昭の各氏に師事。ヤマハ発動機㈱勤務、㈱アルモニコス設立に参画、代表取締役等を経て、現在アルカート（海外技術コンサルタント業）代表、カペラ・アカデミカ代表を務める。

林　百華（ソプラノ）

千葉県船橋市出身。現在聖徳大学大学院音楽文化研究科声楽コース在学中。

石川　真理（ フルート ）

磐田市出身。常葉学園短期大学音楽科卒業、同専攻科音楽専攻終了。2 年間ドイツのミュンヘンに音楽留学。日本フルート協会、静岡県フルート協会、浜松フルートクラブ、磐田フルートクラブ各会員。現在、静岡県西部地域を中心に演奏活動及び後進の指導にあたる。

続　真樹（ フルート ）

浜松市出身。洗足学園音楽大学卒業。フルートを田中貫一、小林茂の各氏に師事。現在、ソロやアンサンブルの演奏活動を行う一方、後進の指導に当たる。静岡県フルート協会会員、浜松フルートクラブ理事。

福田　徳久（ トランペット）

岡山県井原市出身。大学卒業後、ヤマハ㈱に入社。管楽器開発チームの一員としてトランペット他多くの高音金管楽器の開発に一貫して従事し、トランペットのフラグシップモデルの開発に携わる。現在（公財）浜松交響楽団団員。

岡部　比呂男（トランペット）

茨城県日立市出身。トランペットを大倉慈夫氏に師事。大学卒業後、日本楽器製造㈱（現ヤマハ㈱）に入社。管楽器開発チームの一員として当時プロ奏者の間ではあまり評価されていなかったというヤマハの管楽器を現在の品質まで向上させる足掛かりを作る。ヤマハ㈱役員を経て現在（公財）浜松交響楽団理事長。

河野　真剛（バリトン）

浜松市出身。パリ音楽院(CNR)ピアノ科、声楽アンサンブル科卒業。ブレスト・ピアノコンクール１位受賞。モスクワ音楽院声楽科・声楽伴奏科卒業。カリニングラード国際歌曲コンクール入賞。ヤング・プラハ国際音楽祭、グリンカ生誕 200 周年音楽祭、ケルチェット音楽祭等に出演。「静岡の名手たち」オーディション合格。ヤマハミュージック浜松店、SBS 学苑、浜松学芸高校芸術科各講師。二期会・ロシア歌曲研究会会員。

カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家で皇太子殿下が師事された故濱田徳昭先生により命名され、1974 年（昭和 49 年）9 月 2 日に誕生。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年２回及びその他の演奏会を２～３回開催し、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げることを目標としている。

1st Violin	2nd Violin	Viola	Cello	Double bass	Harpsicord
今井　重人	末田　　良	木下　正明	佐藤　隆行	小林　　哲	釘本　真理
◎釘本　英範	宮崎　秀生	桑原　義彦	浜島　吉男	早川　浩一	
林　　明子	村上　香織	小林はる奈	Lynn Konishi		
前澤　　陽	山中　　哲	船山　　敏			

Flute	Oboe	Bassoon	Trumpet	Horn	
石川　真理	大橋　弥生	斎藤　善彦	岡部比呂男	小出　寿朗	袴田　和弘
続　　真樹	佐藤　慶子		福田　徳久	佐藤　博子	本田　悦朗

◎はコンサート・マスター

曲目解説

■サルヴァトル・ローザ(1615～1673)：側にいることを

Star vicino（側にいることは）は、サルヴァトル・ローザという画家で詩人であった人物の作曲だと信じられていましたが、近年、ローマで1696年に演じられた歌劇『幼き王』の中にこの曲が発見され、マンチャの作曲と確認されました。ルイージ・マンチャは17世紀後半から18世紀前半の音楽家ですが、あまり聴き馴染みのない人物ですね。過去の文献は資料が少ないせいか、様々なことが不確定のようです。

■ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685～1759）：私を泣かせてください

Lascia ch’io pianga（私を泣かせてください）は、ヘンデルが作曲したオペラ「リナルド」で歌われるアリアです。ヘンデルはバッハと同じ年である1685年に生まれたバロック期を代表する作曲家で、ドイツに生まれた後にイギリスに帰化して生涯を終えました。彼の代表作である「メサイア」の中のハレルヤのコーラスは誰もが聴いたことがあると思います。バッハは教会音楽を主に作曲しましたが、ヘンデルはオペラやオラトリオなど華やかな劇場で演奏される音楽を多く作曲しました。

■ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：魔笛より「私の喜びは露と消え」

「Ach, ich fühl’s, es ist verschwunden」はモーツァルト作曲のオペラ「魔笛」の第17曲でパミーナ（ソプラノ）によって歌われるアリアです。「魔笛」はモーツァルトを代表する作品で、1791年に作曲されました。台本はエマヌエル・シカネーダーによって書かれました。想い合っていたタミーノ（テノール）が沈黙の試練の最中であることを知らず、無視をされたと勘違いしたパミーナはこの「Ach, ich fühl’s, es ist verschwunden」を歌います。

■アントニオ・ヴィヴァルディ(1678～1741)：２つのフルートの為の協奏曲　ハ長調　RV533

ヴィヴァルディ自身すぐれたヴァイオリニストであり、しかも当時の音楽が主として弦楽を中心に発展していきましたので、ヴィヴァルディの作品の大部分がヴァイオリン曲であるのは当然かもしれません。しかし、他の楽器の為の曲も決して少なくありません。思いつくままに書き連ねてみても、ヴィオラ・ダモーレ、チェロ、マンドリン、フルート、ピッコロ、オーボエ、ファゴット、ホルン、トランペット等の曲が挙げられます。もちろんそれらが色々組み合わされたのは言うまでもありません。概してそれらは、いわゆる実用音楽で、ヴィヴァルディがかれこれ４０年間奉仕していた女子救貧院の生徒の為に作曲されました。作曲年代ははっきりしませんが、２つのフルートの為の協奏曲もそうであったと思われます。
第１楽章：アレグロ・モルト、第２楽章：ラルゴ、第３楽章：アレグロ

■アントニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）：２つのトランペットの為の協奏曲　ハ長調　RV537

作曲の経緯は不明ですが、Federico Maria Sardelliという人の論文によると、「ハ長調」という調性からイタリアのマントヴァに住んでいた頃の作品と考えられるようです。ヴィヴァルディの作品の中ではあまり重視されていないようですが、有名作曲家による重要なトランペットのレパートリーの一つです。現代ではピッコロトランペットで演奏することが多いのですが、ヴィヴァルディの時代なので当時はナチュラルトランペット（ピストンがない）で演奏していたと思われます。
第１楽章：アレグロ、第２楽章：ラルゴ、第３楽章：アレグレット

■ドメニコ・チマローザ（1749～1801）：宮廷楽士長

18世紀後半にナポリ楽派を代表する形で大活躍したオペラの作曲家のチマローザ。『宮廷楽士長』は、多作家の彼が、忙しい毎日の大仕事のあいまに、ちょっとした暇を見つけて、サーッと一筆で書き上げたような、気持ちのいい小品です。出演する歌手はバリトンが、ただ一人です。ペテルブルクや、ウィーンや、ナポリの宮廷で楽長職を務めたチマローザ自身の経験による小さなエッセーのような、私小説のような劇が『宮廷楽士長』です。

歌詞内容

序曲

（宮廷付楽士長、オーケストラに向かって）

・もしもお許しいただけるならアリアを１曲歌いましょう。私はそれ程の者ではございません。

・みなさんにご注文いただけるような私は数少ない現存する古い樂派の一人です。

・ああ、ところで、誰もが知っているあの令名高い大先生方は？どこへ行ってしまわれたのでしょうか。

・さて、それではアリアを一曲歌いましょう。

・お見受けするところ、私の歌を聞いて頂く用意もお出来のようで。でも耳の穴を開いてお聞き下さい。

・私の歌うアリアをこの上もなく、すばらしく歌ってお聞かせしましょう。

・特にその妙味を尽くされたように、かのラテリーノでスカルラッティ閣下がなされたように。

・ホーボエ、ホルン、ヴィオラよろしくお願いしますよ。

・チェロ、ヴァイオリン、コントラバスも拍子どおりにしっかり音を出してください。

（オーケストラは演奏の場所につく）

・さあ気をつけて、皆さん方、弓をしっかり持って、私のいう通りに弾いてください。

・ここは、ヴァイオリンのパッセージです。ライ、ライ、ライ、ラー。

（オーボエに向かって）

・何をやっているのです。親愛なるオーボエ君？　ビオ、ビオ、ビオ、ビオ。

・このパッセージをもう一度始めなさい。

（コントラバスが早く入りすぎる）

・しようのないコントラバスだ。しょうのない奴、しょうのない奴だ。

・ここで何て馬鹿なことをしている？　ここで何て馬鹿なことをしている？

・ここはヴァイオリンのパッセージです。ライ、ライ、ライ、ラー。

（ホルンが妙な入り方をする）

・ブラ、ベルレ、ブラ、ベルレ、ブラ、ベルレ、ブラ。　ああ、どうぞ、どうぞ！

・気おつけて、よく数えなくてはいけません。

・でなければ、どうしようもありません。でなければ、どうしようもありません。

・ここは、ヴァイオリンのパッセージです。　ライ、ライ、ライ、ラー

（入りを間違えたヴィオラに向かって）

・ヴィオラはまだまだ！

（フルートに向かって）

・しっ、フルートもまだまだ！

（怒って）

・それにしても。ここで何て馬鹿なことをしている？　しょうのないコントラバスだ？

・注意が欠けています。注意が欠けています。駄目です。こんなことでは全然駄目です。

・どうぞ皆さん、お願いです。どうぞ皆さん、お願いです。

・ああ、後世ですから、もっと注意してください。

（オーケストラに向かって落ち着いて）

・焦らず、興奮しないで、まず私の言うことに注意してください。

・誰もパッセージを始めてはいけません。

・もしも、私から何の合図もなかったら！　考えてみてくださいね。私は違いますよ。

・皆さんにここで道化を演じて見せているのではありません！

・ここは、ライ、ライ、ライ、ラー、ラー。

（ヴァイオリン、繰り返す）

・おお、すばらしい、結構です。ここはヴィオラのパッセージです。

・ラー、ラー、ラー、ラー。　　ラー、ラー。

（ヴィオラ、繰り返す）

・大変巧い、おお、みごとだ！

・オーボエはこんな風に、　ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

（オーボエ演奏する）

・ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ、ビオ。

・本当に、とてもよろしい！
・さあ、今度はホルンも一緒に、　ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。
（ホルン、自分たちのパッセージを演奏する）
・ブラ、ベルレ、ブラ、ベルレ、ブラ、ベルレ、ブラ。
・満足です。今度は巧くいっています。
・今度は全部一緒に、さあ、どんなになるか、聞いてみましょう。さあ、どんなになるか、聞いてみましょう。
（オーケストラは最初別々に練習した部分を一緒に演奏）
・うまい！　結構！　大変上手だ！　うまい！　結構！　大変上手だ！
・この音は弓の上端を使って。
（ここからはオーケストラは楽士長の説明どおり正しく演奏）
・ここは、スタッカート、ここはレガート、ここはスタッカート、ここはレガート。
・オーボエ独奏！　ヴィオラ！　フルート独奏！　ホルン、遅れずに！
・ここはフォルティッシモ！　そう！　そう！
・おお、何と素晴らしい響き、おお、何でみごとなオーケストラ！
・私はもう安心です。　私はもう安心です。
・おお、何て素晴らしい響き、おお、何てみごとなオーケストラ！
・私はもう安心です。　私はもう安心です。　私はもう安心です。
・この音は弓の上端を使って！　ヴァイオリンとヴィオラ！　ヴィオラとホルンも一緒に！
・ヴァイオリン！　巧い！　フルート独奏！　結構！
・ヴィオラ！　巧い！　オーボエとフルート！　巧い！　ホルン、送れずに！　巧い！
・結構！　上手だ！　よろしい！
・大変巧い！　大変巧い！　大変巧い！
・おお、何て素晴らしい響き、おお、何てみごとなオーケストラ！
・私はもう安心です。　私はもう安心です。　私はもう安心です。　私はもう安心です。
（満足気にオーケストラに向かって）
・巧い！　大変すばらしい！　これで結構です！　私は満足です。
・皆さん方が、それぞれ自分のパートをしっかり弾いて下さったので。
・それでは、もしお嫌いでなかったなら、全く新しい様式の曲を一つ練習してみませんか。
・さあ、楽譜をひろげて、カンタービレ・アレグロを始めてみましょう。
・すなわち二つの色合いがあります。　ちょうどソースのように、
・ソースにもいくつかの風味があるように。　どうぞ、ピアノやフォルテも気をつけて。
（コントラバス、強く弾きすぎる）
・コントラバスはそんなに強く弾かないで、響きが悪くなります。
・ヴィオラとチェロは一緒に、私の作ったパッセージに良く合わせて。
・熱をこめて力強く始めなさい。　この優れた作品をしっかりと元気よく。
（抒情的アリアにつづく）
・楽器と歌の間で愛に満ちた輝かしい花嫁と花婿は結ばれるでしょう。
・ヴァイオリン、どうぞ！
（ヴァイオリン独奏）
・コントラバス、どうぞ。
（コントラバス独奏）
・ファゴット、どうぞ、オーボエと一緒に、オーボエと一緒に。
（ファゴットとオーボエがつづき、ホルンがそれぞれ邪魔にする）
・駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！
・この楽器は今は要りません。今は要りません。今は要りません。
・さあ、ここでフルートとヴィオラ、さあ、ここでフルートとヴィオラ。
（フルートとヴィオラ）
・オーケストラみんな一緒に弾きなさい。　オーケストラみんな一緒に弾きなさい。
（オーケストラ全部）
・これ以上のものは見当たらない。　器楽と歌の結びつき。

・愛に満ちた輝かしい花嫁と花婿。　愛に満ちた輝かしい花嫁と花婿。　愛に満ちた輝かしい花嫁と花婿
・ヴァイオリン、どうぞ！
（ヴァイオリン独奏）
・コントラバス、どうぞ！
（コントラバス独奏）
・コントラバス、どうぞ！
・ファゴット、どうぞ、オーボエと一緒に、オーボエと一緒に。
（ファゴットとオーボエ。ホルンがそれを邪魔する）
・駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！
・この楽器は今は要りません。今は要りません。今は要りません。
（ヴァイオリン独奏）
・コントラバスどうぞ！
・ヴィオラ！
（ヴィオラの情熱的な旋律）
・今度はフルート！
（フルートが生き生きとリズミカルに登場する）
・今度はファゴット、オーボエも一緒に、オーボエも一緒に。
（ファゴットとオーボエがつづき、ホルンがそれぞれ邪魔にする）
・駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！　駄目！
・この楽器は今は要りません。今は要りません。今は要りません。
・オーケストラみんな一緒に弾きなさい。　オーケストラみんな一緒に弾きなさい。
・これ以上のものは見当たらない。
・オーケストラみんな一緒に弾きなさい。　オーケストラみんな一緒に弾きなさい。
・オーケストラみんな一緒に弾きなさい。　オーケストラみんな一緒に弾きなさい。
・オーケストラみんな一緒に弾きなさい。　オーケストラみんな一緒に弾きなさい。
・弾きなさい、弾きなさい。
（オーケストラが演奏し終わっても気が付かないように興奮して歌いつづけている）
（体裁悪そうに言い訳をしながら樂員たちを退出させて礼をいう）
・どうもありがとう、皆さん方。　次回にやってみましょう。
・アンダンテやアレグロやプレストどれも皆さん方をびっくりさせるような。
・カンタービレ・コン・モート、ラルゲット、アンダンティーノ、
・ラルゲット、アンダンティーノ。
・　どんなに腕の立派な人も、絶対真似の出来ないような、絶対真似の出来ないような。

■ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：ディヴェルティメント第２番　ニ長調　K.131

何の機会に書いたかは不明ですが、ザルツブルクで 1772 年 6 月初めに作曲されました。メヌエットを二つ持つ六楽章の大規模なディヴェルティメントです。　編成にホルンを四つも用いています。　アレグロ、アダージオ、メヌエット、アレグレット、メヌエット、アダージオ-アレグロ・モルト-アレグロ・アッサイの楽章で構成されます。　軽快な第一楽章、楽器群の明快な対比が特徴です。　第二楽章は弦楽器だけできれいなメロディーが奏でられます。　ヘンデルのヴァイオリン・ソナタ風です。　次のメヌエットの本舞曲は弦楽器のみ、トリオ I はホルン４本、トリオ II はフルート、オーボエ、バスーン、トリオ III は木管楽器全部、そしてコーダでフル編成となります。　第四楽章はかわいい主題が四回くりかえされます。　次の第二メヌエットも最初の部分に似て楽器のグループ分けをしています。トリオ I はフルートとヴァイオリンとバス、トリオ II はオーボエとヴィオラとバス、コーダ（終結部分）は全編成の演奏です。　このコーダは本舞曲と同じ主題です。　次の楽章は木金管楽器だけの 14 小節の短いアダージオがあり、続いてフル編成によるアレグロ・モルトとアレグロ・アッサイです。　各楽器の特徴を生かした楽想、各楽器群の対比が明快な明るい活発な楽章です。